



Diversification, Complexity, and Bank Performance: Evidence from Japan

伍, 一昌

(Degree)

博士 (商学)

(Date of Degree)

2024-03-25

(Date of Publication)

2026-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8844号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100490069>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



学位論文審査要旨

氏名 伍 一昌

論 題 Diversification, Complexity and Bank
Performance: Evidence from Japan
(銀行の多様化・複雑性と経営パフォーマンスとの関係：日本からの証拠)

審査 令和 6 年 3 月

神戸大学

論文内容の要旨

本論文は、日本の銀行の事業面での多様化が、銀行のパフォーマンスに与える影響を、3つの角度から検討した実証研究である。主たる分析は、様々な指標で計測した多様化が収益性とリスクに与えた影響に関する分析（第2章）、費用関数の推定から範囲の経済性を求め、多様化との関係を明らかにした分析（第3章）、組織構造から指標化した組織の複雑性が収益性とリスクに与えた影響に関する分析（第4章）、の3つである。論文では、こうした分析に通底する博士論文全体の問題意識と各分析の概観を第1章で示し、結果の整理と得られた示唆を第5章で示している。

各分析について詳しく紹介すると、まず第一の分析（第2章）は、銀行が業務を多様化することは望ましいことなのか、というテーマを扱っている。得られた結果によると、多様化は純金利マージンを減少させるものの全体の収益性を改善し、リスクを削減しており、後者の結果は資産選択理論の示唆と整合的である。また、得られた関係が非線形性を持つことや、銀行のタイプによる影響の違いがあることなども示している。このテーマは海外ではある程度の研究の蓄積があるテーマであるが、日本の最新のデータを用いて新たなエビデンスを示した点、また得られた結果の背後にあるメカニズムに関する示唆を与えるような、より詳細な分析が行われている点に、貢献が見られる。

第二の分析（第3章）は、オフバランスシート活動が増加する中で、日本の銀行業には範囲の経済性がみられるのか、その範囲の経済性は多様化とどのような関係にあるのか、というテーマを扱っている。得られた結果は多くの銀行において範囲の経済性が見られることを示しており、また規模の異なる銀行グループ間で、範囲の経済性が収束傾向にある、という興味深い結果も報告している。資産の多様化は範囲の経済性を低減させるという結果など、より深い解釈が必要とされる部分は残っているが、これまで用いられてきた伝統的な手法に加え、分散化の経済性という新たな方法も用いて分析を行っており、一定の貢献が見られる。

第三の分析（第4章）は、銀行の組織が複雑であることは望ましいのか、というテーマを扱っており、その複雑性を、組織構造の面での複雑性、業務面での複雑性、地理的な展開に関する複雑性という3つの側面について計測して分析している。得られた結果は、業務の複雑性のみが銀行の企業価値に正の影響を与えることを示してい

る。リスクに関しては、業務の複雑性が全体的なリスクを減少させる半面、どの複雑性も債務不履行リスクを増加させるという結果が得られている。この分析は、国際展開を行う海外大銀行に関して用いられていた組織の複雑性に関する分析手法を用い、異なる文脈において、また日本で初めて分析しており、十分な新規性がある。

論文審査の結果の要旨

本論文に関しては、仮審査の段階でいくつかの問題点が指摘されていた。具体的には、銀行タイプに関する説明の不足、結果の解釈の不十分さ、既存研究のアプローチとの違いに関する説明の不足、全体像を示す第1章のスタイルの改善の必要性、オフバランスシート活動に関する記載の不足を補う必要性などである。今回の審査においては、これらの問題点について、適切な対処が行われていることが確認された。一方で、論文の一部の体裁、内生性に関する対処方法に関する説明の不適切さ、各章の関係に関する説明の不十分さなどが指摘された。

ただし、こうした指摘はいずれも論文の内容の本質に関わるものではなく、今後この論文を基にして査読付き雑誌への投稿を行う際に、考慮に入れるべき示唆として指摘されたものが多い。上記の通り、本論文の三つの分析にはいずれも独自性が存在し、論文全体として十分な貢献を持つ研究が行われていると判断される。このため、審査委員は、本論文が神戸大学大学院経営学研究科の博士論文として十分な水準に達している、と判断するに至った。

以上の理由から、審査委員は、本論文の著者が、博士（商学）の学位を授与されるに十分な資質を持つものと判断する。

令和6年3月5日

審査委員	主査	教授	内田 浩史
		教授	藤原 賢哉
		准教授	畠田 敬